

『方便から真実へ 浄土真宗』より抜粋

197 疑いとはどんなものですか

解説Ⅱ真宗では、どんなのを疑いというのか知らないのです。私は疑っていないといえ、疑わないうちに思っています、晴れていなければ疑っているのです。往生ほどの一大事、地位も名誉も財産もすべての物を捨てて、次の世界にでて行くのですが、気にかかりませんか。あなたは魂の行き先の不安はありませんか。こんな心がでて行くとすれば、どんな世界に行くだろうかの不安はありませんか。気にかからないのは安心してゐるからではなく、無頓着なのです。親さまに任したのではなく、やりっ放しで自分に対して忠実でないのですよ。親さまが御承知、親さまに逢いましたか、我能く汝を護らんとおっしゃるから、仏さまの仰せには間違いはない、結構でございますね。感情は調子を合わしていますが、あなたの秘密の部屋の自性はうんとすんともいっていませんよ。後生が一大事にならねば、その

機は出ませんよ、これをお助けくださるとは聞いているが、本当に助かるのであろうかと心配はありませんか、気にかかりませんか。

ある処に他人を指導していた同行が、臨終間際になって赤鬼が出た、青鬼が出たと大騒動を始めました。ある人は仕事に追い立てられて、後生とも菩提とも思わなかったが、臨終間際の恐ろしさ、この世の物は何にも間に合わない、何で元氣な間に求道しておかなかったかと後悔した人がいましたよ。気のついたのはよい方です。衆苦に攻め立てられて冥から冥に流転するのです。

一代の間に万億の財を積んだ高利貸しが、家内と子供に分配したとき、長男が泣きだした。「なぜ泣くか、俺の分配の仕方が悪いから泣くか」「お父さん、裸体で生まれた者が、こんなに財産をもらって何の不足がありましたでしょうか」「不足がなければ泣くな」「お父さん、財産は分配してもらったが、欲の塊の業は誰が荷ってくれるのですか、お父さん一人で苦しまね

ばならないではないか」といったとき、静かに考えていた父が、「俺は大抵抜け目のない男
とおも
と思っていたが、一番大事な俺のことを忘れていた。早く坊さんと呼んでくれ」といったそ
うですが、人間は阿呆鳥ですよ。インドは昼は暑いから、阿呆鳥が餌を探しまわっている
が、巣がないから夜が寒い、一晩中巣を造ろう、巣をつくろうと鳴いている。朝になると
昨晚のことは忘れて、餌を拾うことに現を抜かして飛び歩いている。人間も同様です。金儲
け金もうけと、来る日も来る日も追い立てられ、妻が死んだ、子供が死んだ、巣を造ろう
をつくろう、未来の用意をしなければと一時はあわてるけれども、後妻をもらった、子供が
生まれた、遊んではおられない、金儲け金もうけと騒いでいる。また逆縁に出逢うと、巣を
造ろう巣をつくろうと繰り返しているが、なぜ真剣に驚かないのでしょうか。真剣に行き先を
考えると、必ず不安が出る、不安が出ると疑いはつきものです。それが気にかからないとい
うのは、無知なのですよ。

真宗しんしゅうの疑うたがいとは、私わたしは疑うたがうてははいないという簡単かんたんな疑うたがいではなく、晴はれていないのを疑うたがい
というのです。

一口ひとくちにいえば、二種にしゆじんしん深てつてい心しんが徹てつてい底てつていしていなければ、みな疑うたがいの域いきを離はなれてはいないのです。
いくら素直すなおな真似まねをしていても、自力じりきの機執きしゅうが離はなれていなければ任まかしてはいないのですか
ら、何なんとかなろうという自惚うぬぼれがあります。自惚うぬぼれがある間あいだは投なげだしていないから、本願ほんがん
に乗托じようたくしてはいません。出離しゆつりの縁えんあることなし、地獄じごくは一定住家いちじようすみかぞかし、と切きり墮おとされた
人ひとでなければ、撰取せんしゆされた不思議ふしぎの境地きようちは諦得たいとくされてはいません。不思議ふしぎの境地きようちを諦得たいとくして
いなければ、明信みようしんぶつ仏智ぶつちにはなりません。明信みようしんぶつ仏智ぶつちでなければ疑惑ぎわくぶつち仏智ぶつちです。不了ふりようぶつち仏智ぶつちです。
一念いちねんの関所せきしよを越こしたときでなければ、疑惑ぎわくは離はなれてはいません。疑うたがいなく墮おちた人ひとでなけれ
ば、疑うたがいなく助たすかったという自覚じかくはありません。これを蓮師れんしは「露塵つゆちりほども疑うたがいなければ」
と仰おおせられたので、疑うたがいは信仰しんこうの入り口くちで出るものではありません。永年ながねん説教せつきようを聞きかして

ただいて嘘うそとは思おもわないが、これでよかうかと心配しんぱいが出でたのを疑うたがいというのです。

誰だれも本願ほんがんの名号みようごうに向むいて、危あやぶみ疑うたがう者ものはいませんが、機きを見みるとき、どうもはつきりせ

ん、これでよいかしら、ああはおっしゃるけれども、ひよつと墮おちはせぬかと心配しんぱいがあれ

ば、みな疑うたがいの煩惱ぼんのうです。あの心こころは、三毒さんどくの煩惱ぼんのうとは違ちがいます。あのひよつと墮おちはせぬか

の煩惱ぼんのうのある間あいだは、救すくわれてはいません、摂せつ取しゆされてはいません。だから布教ふきようする者ものが、機き

を見るな、機きを見みるものは異安心いあんじんだと威おどして、機きに蓋ふたをして浄土じようどに迂すべり込こもうとしています

が、それはずるい誤魔化ごまかしでありますから、救すくわれてはいません。

鏡かがみに向むけば姿すがたは見みえる、法ほうに向むいたら機きが照てらし出だされて見みえなければ、機きの深心じんしんにはな

りません。機きの深心じんしんになっていなければ、法ほうの深心じんしんにもなっていないません。機法合体きほうがったいの曖昧あいまいな

信仰しんこうから、晴はれたのやら暮くれたのやらわからないから、いつとはなしのお助けたすと調熟ちようじゆくの光明こうみよう

に腰こしを掛かけているのです。

必死で前進しなければ、二種深心の徹底した明信仏智の境地に入ることとはできません。
徹底しない信仰の人を、疑惑の人というのはです。

198 自力の心のある間は不安がある、不安の心を疑いというのですが、自力と疑いとどちらが先につきるのですか。

解説Ⅱ自力の心というのは、私が知らしていただいたのが前に並べた五つではありますが、皆さんどれでも、あなたの心を突いて見れば、なるほどいるなあということがわかるでしょう。あれがつきたとき、同時に疑いは晴れるのですよ。

蓮師も「もろもろの雑行雑修自力の心をふり捨てて」とおっしゃってありますが、疑いを捨てよとは書いてありません。自力が捨てたときには、疑いは晴れているのです。自分の

計^{はか}らいの心^{こころ}が自力^{じりき}です。計^{はか}らいがつきて親^{おや}に計^{はか}らわれていたとき^きは、他力^{たうりき}に生^いかされているのですから、疑^{うたが}いは晴^はれて明^み信^{しん}仏^{ぶつ}智^ちになっ^なっています。明^み信^{しん}仏^{ぶつ}智^ちにならない前^{まえ}を疑^ぎ惑^{わく}仏^{ぶつ}智^ちというのです。その関^{せき}所^{しょ}を「一^{いち}念^{ねん}の信^{しん}定^だまらん輩^{ともがら}は」というので、そこで信^{しん}前^{ぜん}信^{しん}後^ごの水^{みづ}際^{ぎわ}が立^たち、真^{しん}仮^けの分^{ぶん}際^{ざい}を鮮^{あざ}やかに諦^{たい}得^{とく}さしていただくのです。そのときが、二^に種^{しゅ}深^{じん}心^{しん}が徹^{てつ}底^{てい}したというのです。

いわば、自力^{じりき}と疑^{うたが}いとは不^ふ即^{そく}不^ふ離^りで、自力^{じりき}の正^{しょう}体^{たい}がある間^{あいだ}は疑^{うたが}いの影^{かげ}があり、疑^{うたが}いの影^{かげ}のな^なくな^なったとい^いうことは、自力^{じりき}の正^{しょう}体^{たい}が浄^{じょう}尽^{じん}したとい^いうことですから、自力^{じりき}の心^{こころ}を振^ふり捨^すててとい^いわれたので、正^{しょう}体^{たい}の自力^{じりき}が捨^すた^たつたら疑^{うたが}いの影^{かげ}はな^なくなるのです。

他^た力^{りき}の光^{ひかり}がついたと同時^{どうじ}に、暗^{くら}い影^{かげ}は消^きえるのです。自力^{じりき}がつきたとき疑^{うたが}いは晴^はれるのです。私^{わたし}は自力^{じりき}を発^{おこ}したことはな^ないとい^いう人^{ひと}は、他^た力^{りき}に生^いかされてい^いないのです。私^{わたし}は疑^{うたが}うた^たこと^{こと}はな^ないとい^いう人^{ひと}は、晴^はれた人^{ひと}ではありませ^せん。当^あたら^らず触^{さわ}ら^らずの腫^{はれ}物^{もの}に触^{さわ}るよう^{よう}な、あ

やふやな信仰しんこうは無む力りきです。大千世界だいせんせかいに満みてん火ひをも過すぎ行ゆきて聞きく必死ひつしの求道きゅうどうが、絶对ぜったいの悪あくをし知らされて、絶对ぜったいの善ぜんの名号みょうごうと一いっ体たいにさしていただき、捨身しやしんの報谢ほうしゃをさしていただくのです。